



組合員と森林局職員が集まる定例の理事会では、活動報告や今後の予定を話し合う

法だと知っています。でも、それなしには生きていけないという現実もあるのです」と話す。ただ木を植えるだけではなく、森林を利用する人々の生活を変えていかなければ根本的な解決にはつながらない。そこで、住民たちに森林保全活動に参加してもらいながら、彼らの生活改善に向けた支援にも取り組むことにした。

住民自身が森を守り、生活を変える

JICAはこのインド政府の政策を後押しすべく、91年のインディア・ガンジー運河地域への植林事業に始まり、インド全土で22件の森林事業を円借款で支援してきた。その一つが、2006年から実施している「オリッサ州森林セクター開発事業」だ。

インド東部に位置するオリッサ州では、約4割が貧困層。森林面積は4万8000ヘクタールだが、森林の劣化が進み、その4割が疎林となっていた。

そこでJICAとオリッサ州森林局が取り組んだのが、森林伐採が進んでいる周辺のコミュニティごとでの「森林管理組合」の立ち上げ。住民自身がメンバーとなり、州の森林局の職員と協働で、荒廃した森の再生や海岸でのマングローブの植林など、森の維持管



コミュニティホールを活用し、学校に行っていない組合員の子どもに教育の機会を提供

理に、参加してもらうことが目的だ。今では2000以上の組合が設立され、森林再生に向け活動している。「住民の意識が大きく変わり、自分たちで、森を守る」という責任感が生まれています」と、プロジェクトディレクターを務めるオリッサ州森林局のヴィノッド・クマールさんは話す。

さらに、組合が管理する森林局からの資金を、植林だけではなく人々の生活改善にも活用している。例えば、地域の女性10〜15人でグループを作り、組合から融資を受けながら、共同で買ったミシンで手工芸品を作成して販売したり、エコツーリズムを展開するなど、森林以外の収入を得るための活動を実施している。

これに加えてJICAが力を入れているのが、森林局と他省庁の連携だ。インドでは、植林は森林局、井戸の建設や家畜の導入、教育、保健など、人々の生活を改善するための農村開発は地方開発局など、省庁の役割分担が明確だ。しかし、森林保全と人々の生活改善の両立には、複数の省庁が一丸とならなければならぬ。そこで、州政府の中に委員会を設置し、省庁間の横のつながりを構築する仕組みづくりも支援している。こうしたオリッサ州での工夫は、成功例として、他の州へも広がっている。

20世紀はじめには国土の40%が森に覆われていたインド。それが03年には24%にまで低下してしまった。目標は、世界平均の30%まで回復させること。そのカギを握るのは、森の一番近くで暮らす人々の力だ。森と人が共生する明るい未来を切り開くべく、JICAはこれからも支援を続けていく。

組合から融資を受け、女性グループが共同で野菜を育てて販売し、生計向上を目指している



森林の維持管理の一つ、間伐を行う住民



約3・5億人。目覚ましい経済成長を遂げるインドで、その恩恵が届かず、1日1・25ドル以下で生活する人の数だ。その多くは地方の農村地域の人々。道路など

発展から取り残された貧困層

のインフラは整備されず、電気やガス、安全な水も使えない。そんな人々の生活に欠かせないのが森林だ。彼らは農業の傍ら、木材や燃料用に木を伐採したり、果物を採取したりして生活の糧を得る。しかし、人口増加により森林伐採が進行した結果、かつての

緑豊かな森はまばらにしか木が生えていない。疎林へと劣化。森は水を蓄えることができず、農業用水や飲料水も不足し、日々の生活に影響が及ぶようになっていった。

そこで、インド政府は荒廃した森林の再生に向け、1980年代から植林や森林保全を進めてきた。そして、最初は伐採を取り締まるだけだった政策を90年代から方向転換。そのキーワードが「住民参加」だ。

森林が劣化した疎林を再生させるべく、苗木を植える森林管理組合員



森と人々が共に生きる未来を

森林に依存して生きるインドの貧困層の人々。人口増加による過剰な伐採で劣化する森林。JICAは、森林保全と人々の生活改善の両立を目指した支援を展開している。